

## キャリアヒストリー：わたしの場合 No. 7 〈卒後 36 年余。弱みを隠さず失敗経験を共有し、医学教育教授として学習者の育ちを見守る〉

### I. わたしの医学教育者としての特徴を、端的に表現すると？

\*患者安全とプロフェッショナリズムを二本柱に、卒前・卒後の一貫した教育に関わり続ける、「熱量の高い」教育者

\*これまでに苦しんだ多くの失敗経験を糧に、ゆっくりと学びながら自己変革を続ける、晩成型の教育者

### II. わたしが、医学教育者として（／になるために）歩んできたキャリアとライフ：キャリアの時期区分と経験や活動

- ①（大学入学前）期…身内に医療者がいない生育環境で、医師への漠然とした憧れと人の役に立ちたい気持ちなどで医学部を受験し入学する。
- ②（医学部学生）期…相撲三味の学生生活後、6年夏休みのT大学病院分院麻酔科見学で一流の指導者達と会い、世界での活躍を夢みて母校を離れた。
- ③（研修医～留学前）期…指導医らと必要なコミュニケーションが取れず、一人で悶々と悩むが、徐々に自信も生まれ、後輩研修医の指導も増える。
- ④（海外留学）期…英国C大学博士課程（生理学）に研究留学。馴れない環境への適応困難、基礎研究の経験の乏しさ、実験の失敗続き、英語力不足などで精神的に激しく落ち込み、学位論文の完成に予定の2倍の期間を要した。
- ⑤（帰国後のリハビリ）期…卒後12年目の臨床復帰プログラムでは、かつて自らが指導した後輩からの支援が、自分の指導法を振り返る契機となった。臨床医として再出発後、苦しむ研修医の自信回復と成長を支援でき、教育者として人が育つ喜びを実感した原体験となった。
- ⑥（臨床と教育の両立模索）期…T大学病院本院へ異動後は、臨床の激務と並行して講座の教育責任者として教育に携わる。指導医講習会の受講で医学教育学に関心を抱き、FDや研修会の企画・運営に中心的に携わる。新設部署の責任者就任で過労と心労で倒れ、悩んだ末に、教育専任を決心した。
- ⑦（医学教育専門家を目指す研鑽）期…病院で安全管理部を兼任し、卒前・卒後の患者安全教育に取り組んだ。被害者家族や法曹関係者と交流し、自らのインシデントを他者と振り返る中でプロフェッショナリズムへの学びも深め、また貴重な失敗経験を広く他者と共有すべく様々な形で発信した。
- ⑧（医学教育専任）期…教学組織の中枢に加わり、教育プログラムの計画・運営・評価・改革に取り組みつつ、教育実践者として多くの講義・演習を担当している。医学教育専門家認定資格を取得し、医学教育学会大会の実行委員（プログラム委員長）として大会の成功に貢献した。

### Ⅲ. 医学教育者としての、これまでのキャリアとライフの歩み

時期区分	ライフイベント等	特に取り組んだこと (課題・重点等)	達成・実現できたこと (業績・効果等)	困難さや苦勞したこと (問題・悩み等)	原動力や助けられたこと (動悸・契機・環境等)
1. 大学入学前期	・身内に医療者がいない環境で育つ。 ・中高一貫進学校進学。	・塾にも通わず独学で中学受験準備。 ・中高時代は勉強に専念。	・独学で中学受験に成功。 ・有数の中高一貫進学校で成績は常にトップクラス。	・大学受験失敗。「未経験の困難に直面すると動揺し我を失う」弱さを自覚。	・勤勉を重視する成育環境(家庭内、優秀な同級生の多い中高)。 ・教師に常に高く評価される。
2. 医学部学生期	・旧帝国大学医学部に一浪で入学。 ・授業はほぼ出席しない。	・全学の体育会相撲部(3年時は主将)で相撲三昧。 ・医学以外の様々な社会問題を扱う書物を多読。	・相撲(Cリーグ)では個人戦4連覇などの実績。 ・読書を通し、抑圧される弱者への理解を深める。	・相撲に熱中するあまり医学の学修意欲を失いかける。将来への漠然とした不安を抱く。	・6年夏休みのT大学病院分院麻酔科見学で、若い教授の言葉「学生時代の成績は不問」「世界を目指せ」に勇気づけられる。
3. 研修医～留学前期	・母校を離れ、T大学病院分院麻酔科に入局。 ・英語試験不合格が続く臨床留学の夢が潰えた。	・「生き残ることで精一杯」という心境の日々。 ・3年目以降は麻酔科医としての経験値を高めた。	・2年目後半、厳しい指導医に初めて褒められる。 ・5年目には麻酔科医としてほぼ1人立ちできた。	・失敗続きでコミュニケーションも省察もできず、一人悩む(体重13kg減少)。 ・上司との関係に悩む。	・指導医が教授に「歩みは遅いが努力を続け着実に進歩している」と報告。見守り評価する指導医の存在に支えられる。
4. 海外留学期	・英国C大学院(生理学研究所)に研究留学。 ・結婚、長男が誕生。	・基礎研究(循環生理学)。 ・日本社会を見つめ直す。	・6年でPh.D学位取得。 ・アジア各国からの留学生との交流を深められた。	・環境への適応に苦しむ。 ・成果を出せず、上司らに申し訳ない思いで悩む。	・苦しい状況の中で妻と出会い、精神的に支えられた。 ・子供の誕生が励みになる。
5. 帰国後のリハビリ期	・2度目の研修医生活。	・臨床医としての生き残りをかけたリハビリ。 ・集中治療の専門研修。	・麻酔科専門医取得。 ・苦しむ研修医を支援し、回復と成長へと繋げた。	・職場に迷惑をかけていることで悩む。 ・帰国後の生活環境に苦しむ妻を支援する余裕なし。	・同期生や後輩らの支援
6. 臨床と教育の両立模索期	・T大学病院本院に異動、講座の教育担当、集中治療部副部長昇任。 ・過労・心労で鬱になる	・学生、研修医、専攻医への麻酔科臨床教育。 ・休むことなく家庭も顧みずに働き続ける。	・ほぼ1人で学生教育。 ・集中治療専門医取得。 ・研修プログラム責任者。 ・麻酔科教科書編集2冊。	・自己流教育の限界自覚。 ・仕事と生活の均衡喪失。 ・昇任を機に恩師である上司との関係に葛藤する。	・妻の支えて鬱病を乗り越える。
7. 医学教育専門家をめざす研鑽期	・臨床dutyを離れる。 ・医学教育センター専任、安全管理部兼任。	・患者安全教育。 ・professionalism教育。 ・参加型臨床実習の導入。	・教育に関する単著2冊。 ・学外医学教育者と交流。 ・FDや講演を多く実施。	・教育の実践共同体の構築に苦勞する。 ・教育実績評価に悩む。	・医学教育学の奥深さ。 ・医療事故の省察で得た教育者・安全管理者としての学び。
8. 医学教育専任期	・教育部門中枢に参加。 ・教授昇任(卒後36年目)。 ・子供が独立。	・カリキュラム評価・改革に携わる。 ・全学年での教育実践。 ・医学教育学会プロフェシヨナリズム部会の活動。	・医学教育専門家取得。 ・JACME受審(領域7主担当者)。 ・医学教育学会大会(プログラム責任者)の成功。	・JACME領域7での低評価。 ・教育専任後継者の育成。 ・定年後の教育活動継続の方法。	・医学教育学会大会主催で得られた新たな視点が、年をとっても学び続け、自己変革に取り組む動機となっている。

#### IV. 抱負

私は、麻酔科医として大学病院での患者安全推進活動に長く取り組み、その過程で、患者への誠実な対応、自律的行動、社会正義や説明責任など、医療プロフェッショナリズムの重要な構成概念を考察してきました。プロフェッショナリズムと患者安全は医療実践の目的そのものです。これからも私の教育実践の2大テーマとして取り組み続けます。医学教育専門家として、プロフェッショナリズム涵養を柱にした臨床教育を通して安全な医療を提供できる医療者を育成し、社会への説明責任を果たし、そのために必要な教育者のコンピテンシーを幅広く身につけるため、生涯にわたって学びを続けます。

患者安全もプロフェッショナリズムも、これを有効に学ぶためには心理的安全性の保たれた学修環境が必須であり、卒前・卒後のあらゆる学びと実践の場で心理的安全性を確保するのは各々の場のリーダーの責務です。自分の弱みを隠さずに知的謙虚さを維持し、個々の学修者（この中には、これから医学教育を学びたいと考えている皆さんも含まれます）に向き合いその多様性を包摂する、inclusive leadership を身につけた教育者でありたいと思います。

#### V. 次世代や悩めるあなたへのメッセージ

近年はキャリアの比較的早期から医学教育をサブスペシャリティに定め、臨床や研究との両立を目指す人達も増えています。医学教育の面白さ、奥深さへの理解が次世代の医療者に広まってきて嬉しく思いますが、教育業績が適切に評価されず、教育エフォートを高めると自分の本来の専門領域のキャリアに負の影響を及ぼすと不安な人もいるかもしれません。しかし、医学教育分野別評価（JACME）を契機に、医育機関でも教育を重視せざるを得なくなり、教育業績が正しく評価される環境になりつつあります。医学教育専門家が適切に評価・処遇される近未来が待ち受けていると私は信じます。

医学教育に邁進する人ばかりでなく、迷いながらも医学教育との関わりを保ち続ける臨床医や研究者の存在も大切です。教育専従・専任であるか、臨床・研究との両立であるか、はたまた臨床・研究の片手間であるかを問わず、医学教育に少しでも興味のある人達とともに、「緩やかな教育の実践共同体」を作れると楽しいですね。従来は医学教育専門家の背景として、JACMEで言う「主要な診療科」出身の医師が多かったように思いますが、麻酔科を始め「主要でない診療科」を基盤とする人達にも、この「緩やかな教育の実践共同体」に参加してもらえると嬉しいです。医学教育者集団にも多様性が必要です。患者安全の領域では「To err is human（過つは人の常）」と言われる。失敗から学び成長できることは人の特権であると思います。この「キャリアヒストリー：わたしの場合」で、私は自分が経験してきた数多くの失敗のごく一部を記しました。この年になっても失敗は絶えませんが、その都度「自分にはまだ伸び代があるのだ」と言い聞かせています。失敗を含む各自の経験を皆で共有し、省察を経て個からチームの成長へと繋げていける、そのような心理的に安全な学修や医療実践の場で、医学教育に関心のある皆さんと学びを続けていきたいと思っています。医学教育に深入りすべきかどうか悩んでいるあなた。思い切って踏み込んでみてください。あなたが医師として、人間として大きく成長できる多様な機会がきっとそこにはあるはずですよ。